［武蔵野大学］

コミュニティガーデンで広がるしあわせ

明石 修　武蔵野大学工学部環境システム学科准教授

武蔵野大学有明キャンパスの屋上には、コミュニティガーデンが広がっている。広い空のもと無農薬・無化学肥料での野菜の栽培や養蜂が行われ、さまざまな学部・学年の学生、教員、職員が集まり、菜園の手入れや収穫などを楽しんでいる。菜園の活動だけでなく、昆虫を探したり、絵を描いたり、空を飛ぶ飛行機を眺めたりと、思い思いに時間を過ごす人の姿も見られる。都市型のキャンパスにあって、のびのびとした空間になっている。

このコミュニティガーデンができたのは今から6年前、2017年に遡る。武蔵野大学のブランドステートメント「世界の幸せをカタチにする。」の具現化を目的とした武蔵野大学しあわせ研究所の活動として屋上の活用を筆者が提案したことがきっかけである。それまで屋上は、青々とした芝生で緑化されていたものの、人の出入りができず十分に活用されていなかった。そのスペースを、人が集い、また、人と自然がつながる場にしようというのがプロジェクトのコンセプトである。以来、学生、教職員の有志チームによりさまざまな活動が行われてきた。

まずは、メンバーでガーデンの設計・デザインから始めた。パーマカルチャーという人と自然の共生する環境のデザイン手法を用いて、菜園、果樹園、養蜂箱、コンポスト（有機物をたい肥化する設備）、ベンチ、道具小屋など、ガーデンに必要なものを考え、デザインしていった。その後、それらのものを参加者自身のDIYで作っていった。場をつくることから参加者が行うことで、ガーデンが自分たちの場になっていったように思う。

こうしてできたコミュニティガーデンでは多様な活動が展開されている。菜園では、夏はトマト、茄、枝豆、冬は大根、白菜、小松菜などを育てている。収穫した野菜は、参加者でシェアするほか、イベント等でも利用している。コロナ禍前の2019年には屋上で収穫した野菜を使ったピザパー

ティを開催した。参加者が野菜を自由にトッピングして、屋上に設置したピザ窯で焼いて食べるイベントで、学内から200人以上が参加し、大いに盛り上がった。本年度には焼き芋イベントも開催された。また、週に1回開催しているオープンワークは、さまざまな学生や教職員が参加し交流する場になっている。菜園活動を通じて、学部や学年、学生／教職員という属性を超えてつながる機会となっており、オープンなコミュニティが形成されてきた。コロナ禍にあってリアルなつながりは貴重である。参加者からは、屋上の活動が楽しみで大学に通っているという声も聞かれる。

地域とのつながりも生まれてきた。月に一度、近隣のこども園の子どもたちがコミュニティガーデンを訪れ、花を摘んだり、虫を捕まえたり、走り回ったりと自然遊びをしている。屋上には、土や植物などに触れて遊ぶ子どもたちの声が響く。今年からは、野菜を地域の障害者の就労支援施設へ提供する取り組みも、徐々に進んでいる。就労支援施設で障害者の方が作って販売しているお弁当に、コミュニティガーデンの野菜を使っていただこうという取り組みである。コミュニティガーデンの恵みを地域のしあわせにもつなげていきたいと考えている。

人々の憩いの場としてだけでなく、さまざまな生き物が棲み、訪れる場になってきたという実感もある。養蜂活動によるミツバチはもちろん、畑にはダンゴムシ、ミミズなどが生息し、季節ごとに蝶やとんぼ、てんとう虫、鳥など多様な生き物の姿をよく目にし、うれしく思っている。

本学では「仏教の根本精神である四弘誓願（しぐせいがん）を基礎とする人格教育」を建学の精神としている。四弘誓願の「衆生無辺誓願度（生きとし生けるものが幸せになるために）」を体現する場になるよう、活動していきたい。

［写真］
オープンワークはさまざまな学生／教職員のつながる場となっている

［日本女子大学］

心和む癒やしの場 泉フロートガーデン

日本女子大学 総務部 総務課

「泉フロートガーデン」は、2003年10月に目白キャンパスの百年館低層棟の屋上に建設された。

2001年に創立100周年を迎えた本学は、目白キャンパスのランドマークとなる百年館（12階建ての高層棟及び7階建ての低層棟の2棟）を建設した。それにより教育・研究設備の充実が進む一方で、キャンパス内に学生たちが気軽に集うことのできる憩いのスペースをつくってほしいという声が学内外から多く寄せられるようになり、本計画がスタートした。

建設場所や規模等について検討を行っていたところ、大学のPTA組織である日本女子大学泉会をはじめ、多くの方々のご芳志が集まり、百年館低層棟の屋上に庭園の建設が決定した。名称については学生に募集したところ「フロートガーデン」という名称に支持が集まった。また、多くのご支援をいただいた日本女子大学泉会への感謝の意を込めて、庭園名を「泉フロートガーデン」に決定した。

泉フロートガーデンの設計・植栽は、本学卒業生である槇島みどり氏によるものである。設計には様々な工夫が施されており、槇島氏は設計コンセプトを「光・風・香」、「歩・佇・座」とし、訪れる人達の感性に刺激を与えるような「穏やかで明るい癒やしの庭」を目指した。

敷地は南北に約50m、東西約10mの細長い屋上空間で、4つのエリアに分けられており、それぞれのコンセプトに添った植栽や構造物が配されている。

庭園入り口の先に広がる1つ目の「野原のエリア」は、リアス海岸の出入りをデザインに取り入れた法面が特徴である。風でたなびく草花の様子は、植物たちが風とささやき交わしているようにも見える。

2つ目の「語らいのエリア」は、豊穣の象徴樹オレンジを囲む台形のベンチと、長椅子をセットした2基のパーゴ

ラがあり、自由な会話がはずむファニチャー主体の場として学生や教職員のにぎやかな話声の絶えないエリアとなっている。

3つ目の「ひなたぼっこのエリア」は、六角形の木製園路で囲まれている。対面に座る互いの視線を和らげるために瓢箪型に盛土が施されており、四隅の高木類や周囲の生垣のために、別枠の基盤を設けて土量を補っている。

4つ目の「想いのエリア」は、ゲートの奥が生垣に囲まれる正方形のオアシスである。床面は市松柄のデザインで、格式の高さを表現している。避雷針を備えた西洋風東屋であるガゼボを設けているが、傾けた軸線やコーナーの水鉢、植物選びによって和の静けさを求めたスペースとなっている。

このように単調になりがちな長方形の屋上に4つのエリアを設けることにより、限られた空間に変化を与えている。構造物・園路・生垣等により「開く」、「閉じる」、「囲む」ことで視線の移動と誘導を促しているのである。

泉フロートガーデンからは、東には東京カテドラル聖マリア大聖堂の尖塔や、遠く東京スカイツリーを望み、西には富士山、そして南には早稲田から続く市街地と新宿副都心のビル群が見渡せる。

一方、庭園内部には、都会の窮屈さや喧噪から離れ、緑豊かな環境と壮大な景色の下、日常とは違うゆっくりとした時間が流れている。完成から間もなく20年を迎える泉フロートガーデンは、これからも憩いの場として学生をあたたかく見守り、励まし続けていくに違いない。

[写真]庭園から都心を臨む

［大正大学］

都市の屋上農園で、大学の新たな魅力づくり

古田 尚也　大正大学総合学修支援機構教授

はじめに

大正大学のキャンパスは、東京の豊島区と北区の境に近い、旧中山道沿いの巣鴨の地に立地している。大学の周辺は高度に都市化が進み、広いスペースや緑の空間も限られる。

こうしたきわめて都市的な環境の中で、本学では２０１６年から校舎の屋上、キャンパス内の広場などの限られた空間を工夫して使い、学生と教職員が一緒になって約40種類もの野菜を育て、活用する活動を行ってきた。そして、単に屋上で野菜を育てるというだけではなく、地元の企業や小学校、商店街なども巻き込み、その取り組みの内容も年々進化を続けている。

1　取り組みのきっかけ

この取り組みの直接のきっかけは、筆者が２０１５年度に科学技術振興機構（ＪＳＴ）の研究プロジェクト「グリーンインフラによる持続的な国土構築に関する可能性調査」に参加したことだった。同研究プロジェクトでは都市部におけるグリーンインフラの実装のあり方について、豊島区や学内外の関係者と連携した勉強会を行った。その中で出されたアイディアの一つが、大正大学のキャンパスの使われていない屋上やスペースで野菜を育てるというものであった。

とはいえ、実際に何か活動を行うための予算を持っていたわけではなかった。勉強会の中で知り合った銀座ミツバチプロジェクトから、東京のビルの屋上でサツマイモをプランターで育て、それを原料に「銀座芋人」という焼酎を造るプロジェクトに参加すれば、無償でプランターや土、苗を提供しますという申し出をいただいたことから、実際の活動を始めることが可能となった。

それを受け、建築の専門家と共に学内の様々な建物の屋上を調査し、農園活動に適した場所を特定した。さらに、大正大学グリーンインフラキャンパス構想という将

来ビジョンを作成し、その狙いを学内の関係者に説明して歩いた。

こうして、当初10個のプランターでサツマイモを育てるところから始まった屋上農園の活動は、その後大学内外からの資金援助なども得て活動を拡大し、今では屋上に設置した約100基のプランターなどで、年間を通じて約40種類もの作物を育てる活動にまで発展した。

2　活動の多様化と進化

この活動を進める中で、参加する学生や職員、学外の関係者の輪も広がり、また活動内容も多様化していった。2020年からは、この活動はサービスラーニングの授業に組み込まれ、他の活動とともに、巣鴨の地域に学生が入り込んで活動する「すがもプロジェクト」と名付けられた全学的活動の一つにも、位置付けられた。

その中で、大正大学が接する旧中山道が、江戸時代から「種子屋(たねや)通り」と呼ばれるほど、たくさんの種子問屋が立ち並ぶ地域であった歴史を再発掘し、地元に残る種苗会社と協力して、伝統野菜を育て、その歴史をまちづくりに生かす活動も開始した。

2021年からは、伝統野菜をテーマとしたイベント「種子屋街道さんぽ市」も開始。大学の南門広場には「種子屋通り」の歴史を開設する案内板や「種子地蔵」も建立した。

そのほかにも、近隣小学校のSDGs教育への協力、屋上農園を案内する「農園ツアー」の実施、サツマイモプランターの商店街への配布や新たな地域焼酎ブランド「巣鴨芋人」の開発など、活動の幅はますます広がっている。

緑やスペースの限られた都市部の大学だからこそ、屋上空間は工夫次第で大学の新たな魅力を生み出す源泉となる可能性を秘めているといえるだろう。

[写真]屋上農園は、近隣の小学生のSDGs教育にも活用されている